



**Data**

監督: マイケル・パーカー&ステイ  
ーヴン・シン

出演: ジョセフ・ファインズ/シヨ  
ーン・ドゥ/エリザベス・ア  
レンズ/小林成男/リチャ  
ード・サンダーソン/ジェシ  
ー・コーブ/オーガスタ・シ  
ュウ=ホランド/浅野長英

## 👁️👁️ みどころ

オリンピックを巡ってはさまざまな人間ドラマがあるが、本作もその1つ。1924年のパリ五輪の400m走金メダリストであるエリック・リデルは、その翌年きっぱり選手活動をやめて宣教師の資格を得て天津へ。

しかし、満州事変、日華事変、太平洋戦争と続く中、滬巢（ウェイシエン）収容所に収容された彼の運命は？

私には面白い「Based on a true story」だったが、キネマ旬報での評価はイマイチ。たしかに、物語としてはベタな展開が目立つが、どこまでも愚直に宣教師として生きた姿は評価したい。しかして、彼が残した“HOPE”とは・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□ 『炎のランナー』にはこんな後日譚が！ ■□

私は知らなかったが、『炎のランナー』（81年）は、走ることによって栄光を勝ち取り真のイギリス人になろうとするユダヤ人と、神のために走るスコットランド人宣教師という2人の実在のランナーを描いた映画で、1981年の第54回アカデミー賞で作品賞を含む4部門を受賞した名作。

宣教師の家に生まれ、敬虔なクリスチャンだったエリック・リデル（ジョセフ・ファインズ）は短距離走で才能を発揮し、1924年のパリ五輪では100mと200mの代表に選出されたが、予選の日が日曜日（＝安息日）だったため日程変更を要請。それは受け入れられなかったが、結局400mに種目を変更して出場できたエリックは、見事金メダルを獲得することに。

そんな劇的なドラマを演出したエリック・リデルは、カナダ人女性フローレンス・リデル（エリザベス・アレンズ）と結婚し、中国生まれであったこともあって翌年の1925年には彼の人生設計通り、宣教師になって中国での布教活動のため天津に渡ることになった。しかし、中国東北部への進出を狙う日本は、1931年には満州事変を発生させ、翌1932年には満州国を建設。そして、1937年に北京郊外で発生した盧溝橋事件をきっかけとして中国戦線を一気に拡大させて日中戦争に入り、日本軍は天津を占領することになった。そんな状況下、エリックは妻子だけをカナダに帰国させ、自らは苦難の中あくまで宣教師として生きる道を選んだが・・・。

## ■□■布教活動のためエリックは天津に残ったが・・・■□■

本作導入部では、妻子と共に大きなお屋敷に住み、運転手として雇っている中国人のジ・ニウ（ジョン・ドウ）の協力を得ながら、中国での布教活動に従事するエリックの姿が描かれる。しかし、それも束の間、英国領事館からの国外退避の勧告に沿って妻子だけはカナダに戻したものの、自分は天津に残ったエリックは、すぐに屋敷もろとも全財産を日本軍に没収されたため、多くの避難民と共に赴任先の学校で暮らし始めることに。

ところが、1941年12月8日未明（アメリカ時間7日）の真珠湾攻撃によって太平洋戦争が始まると、エリックたち欧米人は現在の山東省濰坊市にあったという濰県（ウェイシエン）収容所に送られることに。

## ■□■濰県（ウェイシエン）収容所とは？その勉強が不可欠！■□■

中国語の勉強が進んでいる今の私は濰県の漢字がわかるから、ネットで少し調べてみると、アジア最大規模の収容所であった濰県収容所では、2005年8月17日に“解放60周年記念”の活動が行われ、当時収容所に拘禁された欧米人67人が60年ぶりの再会を果たしたとのこと。また、この収容所は現在、当時の建物が一部しか残っておらず、その跡地には中学校の校舎と市立病院（一部）が建てられており、残存の建物の1つが「濰県収容所記念館」になっているようだ。

ちなみに、ドイツは2015年に“アウシュビッツ解放70周年”を迎える節目の年となり、『あの日 あの時 愛の記憶』（11年）（『シネマ 29』148頁）、『あの日のように抱きしめて』（14年）（『シネマ 36』53頁）、『サウルの息子』（15年）（『シネマ 37』152頁）等のアウシュビッツものがたくさん作られている。そのためアウシュビッツ強制収容所のことは多くの日本人が知っているが、旧日本軍が天津に作った濰県収容所について知っている日本人が私を含めてほとんどいないのは実に遺憾。本作を契機に、濰県収容所についてもしっかり勉強しなければ・・・。

## ■□■被収容者エリック VS 収容所長クラタ少佐■□■

工藤夕貴がハリウッドスターとして主演した『ヒマラヤ杉に降る雪』(99年)、『シネマ1』53頁)は、太平洋戦争の勃発に伴って強制収容所送りとされた多くの日系アメリカ人を登場させて、強制収容所の姿を描いていた。本作はそれとは逆に、日本軍が欧米人を拘禁するために天津に作った瀋陽収容所におけるエリックたち欧米人の収容風景が描かれる。

ここでは、まず夫婦は例外として男と女が別の棟に分けられたが、そのシークエンスでは、結婚式を挙げたはずの一组の男女を夫婦と認めるか否かという問題が発生する。収容所長のクラタ少佐(浅野長英)は自ら教会での結婚式に乗り込み、新郎新婦から結婚指輪を取り上げたのだから、この2人が夫婦であることを知っているはず。それなのに、そこではどんな対応を？

また、本作のメインテーマは、所長であるクラタ少佐が短距離走に自信を持っているため、エリックがバリ五輪の金メダリストであることを知って勝負を申し込むこと。曲がりなりにも日本帝国陸軍の少佐として“武士道精神”を持っている(と考えている)クラタ少佐は、収容所の劣悪な環境のため体力が落ちている状況での競争を嫌い、エリックには十分な食料を与えるよう命じたが、それって問題の本質を解決できているの・・・？

## ■□■「大脱走」があればこんな「小脱走」も！その報復は？■□■

本作ではエリックと、エリックの献身的な宣教師としての生き方に畏敬の念を抱く中国人の運転手ジ・ニウとの固い友情の他、路上で拾った孤児シャオシートウとの親子のような愛情も描かれる。もっとも、平時ならそれは穏やかなものになるが、エリックが強制収容所に入れられた後、ジ・ニウは抗日組織に入って巧みにエリックとの連絡を取り、食料品等の補充を行っていたから、その活動は常に危険と隣り合わせだ。デビッド・リーン監督の名作『戦場にかける橋』(57年)、『シネマ14』152頁)では、ビルマとタイの国境付近にある捕虜収容所を舞台に、イギリスの将兵を橋の建設工事に強制従事させることのは非をテーマとしてさまざまな重要な問題提起をしていたが、本作でもそれと似たような収容所風景が描かれる。

また、本作で面白いのは、スティーブ・マックイーンを含む多くのハリウッドスターが共演した『大脱走』(63年)とは大違いの、1人だけの小脱走。これは、ジ・ニウたちが肥運びの仕事に従事していることに目をつけて、1人だけを肥桶の中に身を潜めさせて収容所からの脱走を目指したものだが、これが見事に成功する展開が面白い。もっとも、絶対脱走などできないはずの瀋陽収容所から脱走者が1人出たことによって、クラタ少佐以下が残った収容者に示した厳しい報復とは・・・？

## ■□■再度の短距離走の挑戦は？■□■

そのあまりに厳しい報復を緩和するため、エリックが考えたのが再度のクラタ少佐への短距離走の挑戦だ。前回は与えられた食事をみんなに配分していたため、エリックに十分

な体力がつかないまま競争したことを知ってクラタ少佐は怒ったが、勝利者はあくまで自分だと考えていた。しかし、クラタ少佐は今回はエリックの挑戦を受けるの？それとも・・・？

現在、東京医科大学を舞台とした贈収賄問題が発生している。これは、文部科学省の前科学技術・学術政策局長の佐野太と同大の臼井正彦前理事長らとの間で、息子の不正入学のためにやりとりされた贈収賄事件だが、別段珍しいものではない。つまり、この手の贈賄、収賄事件はいつでも、どこの国でもあるものなのだ。しかし、軍規が世界一厳しいはずの旧日本陸軍が支配する濰州収容所において、ジ・ニウたちが仕掛ける看守たちの贈収賄があったとは！本作にはそんなあつと驚くシーンも登場するので、それにも注目しつつ、「大脱走」ならぬ「小脱走」の展開や、その後の日本軍の報復と、そこから生まれる少年シャオシートウの死亡という悲しい現実等、をしっかりと観察したい。

## ■□■彼が残したものは希望だが・・・■□■

本作は「Based on a true story」という字幕は表示されないが、『炎のランナー』の主演として描かれた実在の人物エリック・リデルのパリ五輪以降の後日譚。彼がパリ五輪の翌年の1925年に宣教師として中国の天津に渡ったのが事実なら、濰州収容所に収容されたのも事実。そしてまた、クラタ少佐と100m走の競争をしたのが事実なら、1945年2月に脳疾病のため収容所内で死亡したのも事実だ。

したがって、本作ではそんな史実に沿って映画になりそうな部分を切り取っているわけだが、私がいつも読んでいるキネマ旬報の「REVIEW 日本映画&外国映画」での評価は低い。すなわち、キネマ旬報8月上旬特別号では、3人の評論家の採点は2点、2点、3点だし、「映画というよりTV番組の再現映像みたいでまるで盛り上がらない」、「全体的に古めかしい構成と肌触り」、「ベタなタッチで、実話ベースの重さみみたいなものをこれとって感じられないうえにメッセージの刺さりも浅い」とボロクソだ。たしかに、本作は全体を通してベタなタッチであることには違いないし、本作ラストの盛り上げ方も、とってつけたような感は否定できない。しかし、中国人のジ・ニウがとことんエリックに惚れて献身的協力を続けたのは、エリックが宣教師としての任務を忠実かつ愚直に果たしていたためだ。したがって、彼の死亡は残念だが、「彼は死して希望を残した」というメッセージが本作最大の売りとなっている。1964年の東京オリンピックのマラソンでぶっちぎりの優勝をしたエチオピアのアベベ選手が裸足で走ったのは有名な話だが、本作でもエリックはクラタ少佐との雪の中での100m走を裸足で走るの、それに注目！

さあ、あなたの本作の評価はどうだろうか？そしてまた、あなたは本作からどんな希望“HOPE”を感じ取ることができるだろうか？

2018（平成30）年8月24日記